



1973年、米ボストン生まれ
亜細亜大学国際関係学部
卒業
99年、25歳のとき、7大
陸最高峰世界最年少登頂
記録(当時)を達成。登
山家としての活動のほか、
エベレスト・富士山の清掃
登山、地球温暖化など環
境問題、戦没者の遺骨収
集、教育問題など、幅広
いジャンルで活躍している。
ボーイスカウトには、84年、
イギリスの立教英国学院
小学部在籍中に活動に参
加、野外活動や社会貢献
活動を行う原点となった。
著書に『自然と国家と人
間と』(日経新聞出版社)
『富士山を汚すのは誰か
—清掃登山と環境問題』
(角川書店) などがある。
(のぐち・けん)

ボーイスカウト関係著名人インタビュー

野口 健

アルピニスト

25歳で7大陸最高峰の世界最年少登頂記録(当時)を達成した登山家の野口健さんは、イギリスにいた小学校の6年生のとき、カッコイイ制服に憧れてボーイスカウト活動を始めました。その体験が、自然環境に親しむ心を育み、社会に貢献する大切さを教えてくれたといいます。

——ボーイスカウトに入ったのは？

野口 現地の日本人子弟を対象にした立教英国学院の小学部に在籍していたのですが、6年生のとき学院内にあったボーイスカウトに入団しました。制服がカッコよくてね。とにかくあれを着たい一心でした。制服を着ると、気持ちがビシッと引き締まって背筋が伸びる、いろんなワッペンをもらえるのも楽しみでした。イギリスでは野外活動を生活の一部として、みんな当たり前を楽しんでいるんです。ブッシュ・ウォークという近くの里山を歩くプログラムをよくやりましたが、他人の家の敷地を通ってもまったくおこられない。何しろ、馬に乗って平気で他人の庭を横切っていくんですから(苦笑)。テントを持ってキャ

ンプにもよく行きましたね。このとき野外活動の楽しさを知ったことが、登山家としてのぼくの原点にもなっています。

——社会貢献・奉仕活動も。

野口 「何か地域に役立つ活動をやろうよ」ということになり、小・中学生で構成する班のメンバー自身が考えて学校近くの老人ホームへボランティアに行きました。実は行く前には少し「面倒くさいなあ」と思っていたのですが、班で決めたことだから仕方ありません。行ってみると老人ホームといっても豪華なお屋敷のような施設で、ペットもたくさんいる。そこで、お年寄りのお手伝いをしたり、歌や楽器の演奏をしたりして、半日いっしょに過ごしました。お年寄りたちはぼくたちと

の「ふれあい」をととても喜んでくださり、子ども心に「いい体験ができたな」と感じたのを覚えています。また、班の中では交代で班長をやりましたが、それもよかったです。クラスの中では目立たないような生徒がボーイスカウトの活動では生き生きと輝いたり、リーダーシップを発揮するんです。こうしたボーイスカウトでの体験は、ぼくの今のさまざまな社会貢献活動に間違いなく繋がっていますよ。

——野外活動にせよ、社会貢献活動にせよ、子どものころのこうした「体験」の有無は大きいでしょう。

野口 ぼくの親父が外交官(元イエメン、チュニジア大使の野口雅昭氏)で、赴任先で小学生や中学生のぼくをいろんな「現場」に連れていってくれてね。イエメンでは紛争地域へ行ったり、野戦病院のような救急病院に運ばれてくる子どもたちが次々と亡くなっていくのを見てショックを受けたこともありました。そんな折々に親父はぼくにこう教えてくれたのです。「世の中にはA面とB面がある。A面は放っておいても大丈夫だから、お前はB面の方を見るようにしなさい」とね。そのことが心に残っているから、今やっている活動も清掃登山にせよ戦没者の遺骨収集にせよ、通常は「表に出ることのない」B面ばかりなんです。そして今はぼくが、小学生の娘をいろんな「現場」に連れて行くようになり、かつて原爆の被害を受けた広島や、東日本大震災の被災地にも一緒に行きました。「子どもに悲惨な現場を見せるとトラウマになる」と反対する声もあるようですが、ぼくは違うと思う。現場へ行くと、子どもなりに、いろんなことを感じ心に残る。そして自分の力で物事を考えるようになるんですよ。——それに比べて今の子どもは「大事」にされ過ぎている？

野口 ある小学校では、事故が起きたために「木登り」を禁止したそうです。責任ある立場の校長先生としては仕方のない措置だったのかもしれませんが、ぼくは反対です。これじゃ「交通事故に遭わないように外へ出るな」という発想と同じじゃないですか。自然の中には確かに危険なことがたくさんありますが、いろんな「体験」をし、時には痛い思いもしながら、学んでいくことが大事なのです。調子に乗って木登りをしているうちに高

CONTENTS

- 02 著名人インタビュー
野口 健／アルピニスト
- 04 部門別 ボーイスカウト流
夏の水遊び入門
- 09 ニッポン全国元気団紹介
さいたま第8団
- 10 第39回全国ボーイスカウト
写真コンテスト入賞作品発表
- 12 創立90周年記念事業
- 14 16NJ大会情報
- 15 「ウェルカム・ザ・ワールド」プロ
ジェクト/スカウティングの知って
てちょっと良い話 (16)
- 16 そなえよつねに保険 事故データ
の分析
- 17 信仰奨励
- 18 日本連盟情報
- 19 新指導者訓練体系
- 20 ローカルホットライン
- 22 Creating a Better World
- 23 世界スカウト環境プログラム
／外国語会話バッジ

い所まで登り過ぎ、怖い思いをしながら恐る恐る降りてきた体験なんて、誰だってあるでしょう？ それを「危険だから」といって最初から体験させないと、イザというとき、何にもできない、「生き抜く力」がない人間になってしまいます。

—実際、「生き抜く力」がない子どもたちをたくさん見てきたとか。

野口 海洋学校で、転覆したときにカヌーから脱出する方法を練習していた中学生が、転覆したまま海の中で「固まって」しまったのです。普通なら、苦しくて仕方がないからもうこうとすと思いましたが、それすらもしない。山でも同じようなことがあり危うく大学生が命を落とすところでした。

—おこられた経験も少ない。

野口 ある大学で講演をおこなったとき、30分ぐらい遅れて会場に入ってきた男子学生がいました。何と、ハンバーガーを頬張りながらです。前から5列目ぐらいの席に座ると、今度は隣の女子学生とおしゃべりを始めた。ぼくは演台からその学生に目線と仕草で、「静かに」と2度にわたって注意しましたが、聞きません。ぼくの場合、3度目はありませんから（苦笑）、学生を呼んで、「選択肢は2つだ。黙って席に座っているか。オレにぶん殴られるかだ」と言い渡すと、ビックリして泣きそうになっているんですよ。講演後、多くのHPに書き込みがあった。「学生にも聞かない権利、はある」というのです。だったら最初から来なければいい。今の若者の中に

は「権利」や「自由」をはき違えている人がいると思いますね。

—これは「大人」の責任ですね。ただ、今は親世代自身も「体験」が少ないから、公共心も、自然体験の楽しさも、子どもに伝えられません。

野口 子どものころの「体験格差」が大人になって影響してくるんでしょうね。確かにダメな大人は増えています。ただ、自然体験の楽しさを知るのには大人になってからでも遅くありませんよ。ボーイスカウトのリーダーになるのは保護者が多いと思いますが、野外活動の経験がなくとも、子どもたちと一緒に学んでいけばいいじゃないですか。特に日頃、子どもと接する機会が少ないお父さんたちには「存在感」をアピールするチャンスです。大人も子どもも、スカウト活動でたくさんの体験を楽しんでいきましょう！



聞き手／喜多 由浩

産経新聞文化部編集委員。1960年生まれ。近著に『日本から男の子を育てる場所が消えていく』（主婦の友新書）。千葉・船橋第14回カブ隊長。

5月・6月の主な事業

ボーイスカウト日本連盟創立90周年記念事業

平成24年度全国大会

SCOUTING, value for life!



日程／平成24年5月26日(土)～27日(日)

会場／国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京・代々木)

詳しくは
P.12へ